Bulletin of Aichi Univ. of Education, 71（Educational Sciences）, pp. 105 − 109, March, 2022

新聞コラムで多用される類似する出来事を提示する手法の効果について

伊藤 俊一

情報教育講座

Discussion about Effect of Analogy in Newspaper Column

Toshikazu ITO

Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Ⅰ．はじめに

文章には，ジャンルごとにそれぞれ特有の文章構造が存在する。文章を扱う教育においては，それらのジャンル固有の文章構造をメタ認知的に理解することが，文章の作成および読解を促進する効果をもたらすと考えられている。例えば，清道（2010）は，「意見文の「型」を提示することにより，高校生の書く文章は量的及び質的に充実したものになることが示された」と報告している。

文章を扱う教育の中で従前より教材として用いられることの多いジャンルの一つとして，「新聞コラム」を挙げることができる。ここで言う「新聞コラム」とは，各社の新聞朝刊一面に連載されているコラム欄のことを指す。例えば，毎日新聞における「余禄」，朝日新聞における「天声人語」，読売新聞における「編集手帳」，等がそれに該当する。新聞コラムは，いわゆる“巧みな”文章の例として教材の中で用いられたり，入学試験における読解問題のための文章材料として用いられたりするなど，文章を扱う教育の中では汎用的に使用されることの多いジャンルであると言える。

その反面，新聞コラムの文章構造には，新聞コラムというジャンルに特有の際立った特徴が認められることも事実である。特に，ある出来事，例えば，その時点で世間の関心を集めている出来事，等を主たるトピックとしてコラムの中で取り上げる際に，まずはその出来事と類似した構造を持つ過去の出来事に言及し解説することから始める，という文章構造が，他の文章ジャンルと比較しても，新聞コラムにおいては際立って高い頻度で出現する。例えば，Appendixに載せた「新聞コラム例1」（毎日新聞「余禄」（2017年6月1日））では，主たるトピックとして「財務省や文部科学省の文書管理」というその当時世間で話題になったトピックが言及されているが，その前の段落では，それと類似性の高い独立したトピックである「終戦時の公文書焼却」に関する説明が，コラム全体の1/3以上の文字数を費やして言及されている。

主たるトピック（以下では，ターゲットと呼ぶことにする）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（以下では，ソースと呼ぶことにする）を配置する，という文章構造は，一般的には，アナロジーとしての理解を読み手に促すことを目的として用いられることが多い。例えば，谷口（1988）は，文章中でアナロジーが有効に機能する要件を次のようにまとめている。

「第1は学習すべき材料とアナロジで説明される概念の形式的構造が類似している。第2にアナロジは，学習すべき材料よりも学習者にとって熟知した具体的な内容であり，イメージを浮かべやすい。第3にアナロジは学習すべき内容の理解し難い点を説明している。」（谷口（1988））

しかしながら，新聞コラムにおいては，主たるトピック（ターゲット）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（ソース）が配置される場合であっても，必ずしもアナロジーとしての理解を読み手に促すことが意図されているとは解釈できない場合がほとんどである。なぜなら，新聞コラムにおける主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）は，谷口（1988）の指摘する第2の要件である「学習すべき材料よりも学習者にとって熟知した具体的な内容であり，イメージを浮かべやすい」という要件を満たしていないケースがほとんどだからである。すなわち，多くの新聞コラムにおいては，ソース部分もまた，読み手にとってはターゲット部分と同様に，熟知しているとは言い難い事柄（例えば，過去の出来事，故事，等）について言及される場合がほとんどである。例えば，Appendixの「新聞コラム例1」において，主たるトピックである「財務省や文部科学省の文書管理」よりも，それと類似性の高い独立したトピックである「終戦時の公文

書焼却」のほうが，読み手にとって熟知した具体的な内容を含んでいるとは言えないであろう。

新聞コラムにおいて，主たるトピック（ターゲット）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置する，という文章構造が多く用いられているにも関わらず，それが必ずしもアナロジー的な理解を読み手に促す役割を担っていないという現状の背景としては，そもそも新聞コラムというジャンル自体が，事実や書き手の主張を読み手に正確に伝えることを主たる目的としては想定していないという事情があることが考えられる。むしろ，新聞コラムは，ジャンルとしてはエッセイに類するものであり，書き手の主観的感想を読み手が“味わう”，“楽しむ”ことに主眼を置いた文章としての性格が強いと考えられる。

このような新聞コラムのジャンルとしての特徴を，鈴木（2010）は次のようにまとめている。

「「事実」を伝えることを目的とした報道記事でもなく，また新聞社としての統一見解を発表する社説でもなく，また社外もしくは社内の人間が抱く考えを述べる意見記事でもない。時事に即しながらも特定の問題に集中せずに，いわば思いついたことを語るエッセイである。」（鈴木（2010））

また，塩澤（2004）は次のようにまとめている。

「日本の新聞コラムは「結論を最後の方で出すことが好まれる点，「説得のストラテジー」に主眼を置くよりもむしろ「主観的感想を述べる場合が多」い点から判断すると，英語のコラムとは，ストラテジー，構成，執筆者の論述の姿勢など，すべての点で相違することが分かる。」（塩澤（2004））

では，アナロジーとしての理解を読み手に促すことを意図しているとは言い難い新聞コラムにおいて，主たるトピック（ターゲット）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置する，という文章構造が多用されるのは，なぜなのだろうか。あえて独立した別のトピック（ソース）を配置するという文章構造が読み手に与える影響は，具体的には，どのようなものなのであろうか。本研究では，これらの疑問に答えるために，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）が文章中に存在することが，それらが存在しない場合と比較したときに，読み手の文章評価にいかなる違いをもたらすのかを実験的に検証することを目的とする。

文章を扱う教育の中で教材として用いられることの多いジャンルの一つが新聞コラムであると考えられる以上，その文章構造の特徴と，その文章構造が読み手に及ぼす効果を明らかにすることは教育的見地からも重要であると考えられる。

Ⅱ．方法

1．材料

(1) 新聞コラム

毎日新聞のコラム欄「余禄」および中日新聞のコラム欄「中日春秋」を対象とし，主たるトピック（ターゲット）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置する，という文章構造を持つコラムを抽出した。それらの中から，本研究では，毎日新聞「余禄」14編，中日新聞「中日春秋」14編，計28編を材料として採用した。（Appendixに，材料として採用された新聞コラムのうち2編を例として載せる。）

採用されたそれぞれの新聞コラムについて，ソース部分を削除しターゲット部分のみを残した「ソースなし条件」の文章と，原文章どおりターゲットの前にソースが配置されている「ソースあり条件」の文章の2種類を用意した。「ソースなし条件」の文章については，ソース部分を削除することによって生じた指示語の不自然さを解消するために，指示語を指示先の具体的な名詞句に置き換える，指示語を省略する，等，若干の修正を施した。

(2) 質問紙

実験参加者が新聞コラムを評価するための評価項目として，主に国語科教育で文章を評価するために用いられている総合的評価項目2項目，観点別評価項目4項目，計6項目を用いた（青木（1978），石田・森（1985））。それぞれの評価項目は，質問紙の中では以下の表現によって提示された。

総合的評価（2項目）：

・客観的総合評価
　客観的に見てうまい作文といえると思う。

・主観的総合評価
　主観的に見てこの文章が好きだと思う。

観点別評価（4項目）：

・説得力
　筆者の主張が良く伝わると思う。

・表現力
　個々の文の言い回しが巧みだと思う。

・構成力
　文章全体の構成がうまいと思う。

・独創性
　全体的にユニークで個性的だと思う。

これらの評価項目は，質問紙の中では5段階の評定尺度として提示された。評定尺度の各段階は以下の表現によって示された。

1：そう思わない
2：どちらかというとそう思わない
3：どちらともいえない
4：どちらかというとそう思う

5：そう思う

2. 実験参加者

大学の学部生40名であった。

3. 手続き

実験参加者は, 28編のコラムを, 半数の14編は「ソースなし条件」で, 残りの14編は「ソースあり条件」で, 自分のペースで読解した。それぞれのコラムが,「ソースなし条件」と「ソースあり条件」のうち，どちらの条件で割り当てられるかは，実験参加者間でカウンターバランスされた。また，28編のコラムの提示順序は各実験参加者内でランダマイズされた。

実験参加者は，コラムを1編ずつ読み終えるたびに，そのコラムに対する評価（総合的評価2項目，観点別評価4項目）を質問紙を用いて5段階評定した。

Ⅲ．結果

28編のコラムに対する各条件（「ソースなし条件」・「ソースあり条件」）の評定平均値を，評価項目ごとに算出した。それらの評定平均値を表1に示す。

28編のコラムに対する条件間（「ソースなし条件」・「ソースあり条件」）の評定平均値の差を，評価項目ごとに1要因2水準の分散分析によって検定した。評価項目ごとの検定結果は次の通りであった。

総合的評価（2項目）：

・客観的総合評価

「ソースなし条件」と「ソースあり条件」の間で評価に有意な差は認められなかった（F（1,27）=2.83, p>.10）。

・主観的総合評価

「ソースあり条件」のほうが「ソースなし条件」よりも評価が高いことを示す有意な傾向が認められた（F（1,27）=4.13, .05<p<.10）。

観点別評価（4項目）：

・説得力

「ソースなし条件」と「ソースあり条件」の間で評価に有意な差は認められなかった（F（1,27）=0.01, p>.10）。

・表現力

「ソースあり条件」のほうが「ソースなし条件」よりも評価が有意に高かった（F（1,27）=7.04, p<.05）。

・構成力

「ソースなし条件」と「ソースあり条件」の間で評価に有意な差は認められなかった（F（1,27）=1.92, p>.10）。

・独創性

「ソースあり条件」のほうが「ソースなし条件」よりも評価が有意に高かった（F（1,27）=4.86, p<.05）。

Ⅳ．考察

新聞コラムにおいて，主たるトピック（ターゲット）よりも前に，その主たるトピックと類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置することが読み手による文章評価に影響を与えたと考えられる評価項目は，総合的評価としての「主観的総合評価」，および，観点別評価としての「表現力」,「独創性」の3項目であった。これらの評価項目においては，いずれも，ソース部分の存在が文章評価を高める役割を果たしたと考えられる。このことから，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）は，新聞コラムの読み手に対して，その文章が巧みな表現を用いたユニークな文章であり（表現力・独創性），好感が持てる文章である（主観的総合評価），という評価を促す役割を果たすものであることが示唆された。

その一方で，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置することによる影響が有意には認められなかったのが，総合的評価としての「客観的総合評価」，および，観点別評価

表1：評定平均値

	ソースなし		ソースあり	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
総合的評価（2項目）：				
客観的総合評価	3.37	0.40	3.52	0.37
主観的総合評価	3.06	0.50	3.26	0.58
観点別評価（4項目）：				
説得力	3.57	0.49	3.58	0.51
表現力	3.28	0.43	3.50	0.36
構成力	3.38	0.39	3.52	0.37
独創性	3.29	0.44	3.50	0.41

としての「説得力」,「構成力」の3項目である。筆者の主張を的確に伝えること（説得力），文章構成が適切であること（構成力）は，レポート等の作成および読解を重点的に扱うアカデミックライティングにおいては，特に重要視されている項目である（長谷川･堤（2011））。しかしながら，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置するという新聞コラムにおいて多用される手法自体には，文章の説得力や構成力の評価を高める効果があるとは認められなかった。それらの手法は，必ずしも説得力や構成力といった観点からの効果を意図して用いられているものではないことを示唆する結果となった。

以上のことを総合的に考えると，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置するという手法は，新聞コラムにおいては，主に，文章の“修辞的（レトリカル）”な質を高めるために多用されているということが推察される。それは，新聞コラムがジャンルとしてはエッセイに類するものであり，書き手の主観的感想を読み手が“味わう”，“楽しむ”ことに主眼を置いた文章としての性格が強いものであることに起因すると考えられる（塩澤（2004），鈴木（2010））。谷口（1988）が言及しているような典型的なアナロジーが，一見すると，形式的には本研究で取り上げた新聞コラムと同様に，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置するという構造を保ちながらも，「学習すべき材料よりも学習者にとって熟知した具体的な内容であり，イメージを浮かべやすい」（谷口（1988））というアナロジーの要件を満たすことによって，主として読み手の文章理解を促す役割を果たしているのとは，そもそも異質のものであると考えることができるであろう。

では，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）の存在が，巧みな表現を用いたユニークな文章であり，好感が持てる文章である，という言わば“修辞的（レトリカル）”な意味での評価をもたらすメカニズムは，いかなるものであろうか。その問題こそが，今後の重要な研究課題の一つになると考えられる。一つの可能性としては，ソース部分とターゲット部分の思いもよらなかった関係について書き手から新しい気づきを与えられる，という読み手の体験自体が，その評価に関わっているのかもしれない。あるいは，ターゲット部分の解釈に対してソース部分が新しい視点を提供する役割を果たすということが関わっているのかもしれない。今後は，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）を配置するという新聞コラムにとって特徴的な手法が，文章の“修辞的（レトリカル）”な評価を高めるに至るメカニズムについて，さらに解明を進めることが必要であろう。

文献

青木幹男（1978） 表現力の基礎的・基本的事項とは何か ―小・中の指導事項の分析を通して― 教育科学／言語教育，242，11-17.

長谷川哲子・堤良一（2011） アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？ ―意見文の分析を通じた一考察― 大阪産業大学論集（人文・社会科学編），11，21-34.

石田潤・森敏昭（1985） 小学生の文章表現の発達的変化 広島大学教育学部紀要，1（33），125-131.

清道亜都子（2010） 高校生の意見文作成指導における「型」の効果 教育心理学研究，58，361-371.

塩澤和子（2004） コラムの文章構造：語句の反復表現を手がかりに 筑波大学文芸言語学系文藝言語研究（言語篇），45，1-28.

鈴木正道（2010） 日本の新聞の一面コラム 法政大学言語・文化センター「言語と文化」，7，43-58.

谷口篤（1988） 文章の保持における具体的アナロジ挿入の効果 教育心理学研究，36，282-286.

Appendix

以下に，本研究で使用した28編の新聞コラムのうち，2編を例として掲載する。波線部は，主たるトピック（ターゲット）と類似性の高い独立した別のトピック（ソース）に該当する部分である。それ以外は，主たるトピック（ターゲット）に該当する部分である。

新聞コラム例1

日本の役所にどれほど文書がたまっていたかを裏側から示す出来事に終戦時の公文書焼却がある。玉音放送前日の閣議決定で公文書の焼却を命じられた内務省の官房文書課の事務官はこんな回想を残している。「後になってどういう人にどういう迷惑がかかるか分からないから，選択なしに全部燃やせということで，内務省の裏庭で，三日三晩，炎々と夜空を焦がして燃やしました」。焼却指令は退職者が所持していた文書にも及んだ（吉田裕（よしだゆたか）著「現代歴史学と戦争責任」）。

さてひそかに何か命令でもあったのか，それともそんたく上手が焼いたのか。そうもかんぐりたくなる財務省や文部科学省の文書管理である。国有地の格安売却や特区の獣医学部新設で世の関心を集める文書がことごとく出てこない。なかでも「総理のご意向」が記された文書の場合，前文科事務次官が省内の文書と確言したのに政府は「確認できない」で押し通すつもりらしい。前次官は首相補佐官の働きかけも明かしたが，これも面会の記録は案の定残っていない。学部新設をめぐるプロセスは適切と答弁した首相だが，政策決定の公正さは後から文書で検証できるはずの今日の官僚制である。もしも政治権力にその解明を妨げる行為が

あれば厳しく指弾されるのは韓国や米国で見ているところだ。国民が注目する国政の意思決定に記録がないのならば，その経緯を含め国会で解明せねばならない。記録のないことはなかったことというのは終戦時の文書焼却の論理だ。

毎日新聞「余禄」（2017年6月1日）

新聞コラム例2

重いモノを二人以上で持ち上げるには掛け声がないとタイミングが狂い，うまくいかない。掛け声はだいたい「いっせいのせい」や「せーのっ」か。友人がある掛け声について腹を立てていたことを思い出す。友人の母親が亡くなり，棺（ひつぎ）を運ぶとき，葬儀会社の若い方が「せーのっ」の掛け声を使ったそうだ。その掛け声に，母親が引っ越し荷物か何かのように扱われた気になったという。悪気はなかろうが，こういう場合，「せーのっ」の掛け声は，目の前の悲しみの状況とはうまく釣り合わぬ。

「せーのっ」に似た話かもしれない。ごみと呼ばないで。熊本県社会福祉協議会が発行する被災地ボランティア向けのガイドブックによると被災によって汚れていても家財道具をごみと呼ばれたくないと思っている。よく分かる。テーブル，たんす，学習机。泥まみれでも，壊れていても，そこには思い出と家族の会話がしみついているはずである。捨てなければと分かっていてもそれをごみと呼ばれることはやりきれないだろう。ただでさえ心の傷ついている被災直後である。先の集中豪雨に襲われた九州北部の被災地にこの週末，大勢のボランティアが集まった。ありがたい。被災地を気遣う善意の人にごみと呼ぶ人は少ないと思うが念のため。それは家財道具という呼び方さえぶっきらぼうすぎる別れがたい「家族道具」である。

中日新聞「中日春秋」（2017年7月17日）

（2021年9月21日受理）